

## 海上自衛隊第二術科学校 オープンスクール カレッジ防衛モニター 青木 健史

海軍機関学校と聞けば、多少なりとも海軍をかじったことのある者なら大抵は同情するだろう。「板子一枚下地獄」。喫水線の遥か下、密室の入り組んだ迷宮にあって石炭ないし機械油にまみれてエンジンを動かす。露天で弾を浴びぬかわりに脱出も困難であるから、フネが沈まば諸共に…。旧海軍で機関科といえば、そんな配属であったし、その仕事に対し誇りを持っていたエンジニア・オフィサーも多かったということを、何かの本で読んで記憶している。

去る9月半ば、私は横須賀・船越にある海軍機関学校、現在の海上自衛隊第二術科学校を訪ねた。冒頭の如く、エンジニアの幹部や曹士を養成する学校である。どれだけ屈強な荒くれ者が職人的な技術を以て仕事をしているのかと意気込んで出掛けて行ったのである。ところが、訪ねたエンジンのコントロールシミュレーション室にいたのは、屈強な荒くれ者ではなく、ひょうきんなおじさんという表現が似つかわしい教官であった。

その教官のおじさんは、冒頭で私が記憶していた機関科の常識を説明開始早々いとも簡単にぶち破った。「エンジンのコントロールなどは簡単ですよ。子供でもできます。御覧に入れましょう」。教官は観衆の中の子供をコントロール・パネルの前に座らせ、2、3指示を出す。子供がその通りにスイッチをいじると、いとも簡単にエンジンを動かしてしまっただけ。私は、私を含めた観衆のほとんどは呆気に取られてしまった。今は電子制御で、ほとんどの動作をやっ

てしまっただけ。しかし、電子化されたところでそこに甘んずることなく非常時に備えるのが自衛隊という組織の強みである。訓練の過程ではエンジンを分解し、元の通り組み直せるようになるまで構造を学ぶという。ガスタービンエンジン、ディーゼルエンジンの始動展示では、どれも訓練を重ねた自衛官により作業が粛々と進められ、その動作は紛れもなく専門的な技術者集団であった。

先端技術と、人の技術が共生する。海原を雄大に進む日々進化する護衛艦の腹の中では、そんな光景が繰り広げられているのであった。

おじさん教官はしかしました、電子化される前の護衛艦の「内臓」を知っていた。「なにせね、昔はマッチでエンジンを点火するんです。大きな松明みたいなのに火をつけてね、罐にがばっと入れるんですよ!」。助手の海曹をも巻き込んで生き生きと話をすることの教官も、仕事に誇りを持つエンジニア・オフィサーの魂を脈々と受け継ぐ一人であった。技術が変わって昔の手法が伝わらなくなっても、こうしたエンジニア・スピリットは受け継がれてゆく。その片鱗を、私はこの日見た気がした。

## 加賀町警察署交通安全パレードで自衛隊をPR

自衛隊神奈川地方協力本部（本部長 松田 辰雄 1等海佐）は、9月30日（水）、横浜市中区山下町にある加賀町警察署交通安全パレードに参加し、行事のメインとして行われた「ゆるキャラ」パレード行進で、神奈川地本のキャラクター「はまにゃん」が数々のゆるキャラに交じり奮闘した。

この催しは、加賀町警察署が主催し、「秋の交通安全キャンペーン」として横浜にゆかりのある「ゆるキャラ」が一同に集まり、横浜中華街を練り歩くもので、沿道には大勢の見物客が詰めかけ、「はまにゃん」も子どもから大人まで幅広い年齢層の方々から声援を受けたり、数多くの記念撮影に収まるなど、催しは大盛況のうちに終了した。

神奈川地本は、「今後も、積極的に広報し、地域の方々に、防衛省・自衛隊を理解していただくよう努めていく」としている。



はまにゃんと子どもたちのふれあい



1日警察署長とはまにゃんの記念撮影



パレード出発前に記念撮影



横浜市中区長とゆるキャラたち